

冬の蠅

梶井基次郎



冬
の
蠅

冬の蠅とは何か？

よぼよぼと歩いている蠅。指を近づけても逃にげない蠅。そして飛べないのかと思っかれているとやはり飛ぶ蠅。彼等かれらは一体どこで夏なつご頃の不逞ふていさや憎々にくにくしいほどのすばしこさを失うって来るのだらう。色は不鮮明ふせんめいに黝くろんで、翅し体たいは萎縮いしゆくしている。汚きたい臟物ぞうもつで張り切きっていた腹は紙こ撚よりのように瘦やせ細こっている。そんな彼等がわれわれの気もつかないような夜具の上などを、いじけ衰おとろえた姿で匍はつているのである。

冬から早春にかけて、人は一度ならずそんな蠅を見たにちがいない。それが冬の蠅である。私はいま、この冬の私の部屋に棲すんでいた彼等から一篇の小説を書こうとしている。

1

冬が来て私は日光浴をやりはじめた。溪間たにまの温泉宿なので日が翳かげり易やすい。溪の風景は朝遅おそくまでは日影のなかに澄すんでいる。やっと十時頃溪向せこうの山に堰せきとめら

れていた日光が閃々せんせんと私の窓を射いはじめる。窓を開けて
 仰ぐと、溪の空は虻あぶや蜂はちの光点が忙いそがしく飛び交かっ
 てる。白く輝かがやいた蜘蛛くもの糸が弓形に膨ふくらんで幾いくすじ条も幾条
 も流れてゆく。(その糸の上には、なんとという小さな天
 女！ 蜘蛛が乗っているのである。彼等はそうして自分
 等の身体からだを溪のこちら岸からあちら岸へ運ぶものらし
 い。) 昆虫。昆虫。初冬といつても彼等の活動は空に織
 るようである。日光が櫛かしの梢こずえに染まりはじめる。する
 とその梢からは白い水蒸気のようなものが立騰たちる。霜が
 溶とけるのだらうか。溶けた霜が蒸発するのだらうか。い

や、それも昆虫である。微粒子のような羽虫がそんなふうに群がっている。そこへ日が当たったのである。

私は開け放った窓のなかで半裸体はんらたいの身体を晒さらしながら、そうした内湾うちうみのように賑にぎやかな溪の空を眺めている。すると彼等がやって来るのである。彼等のやって来るのは私の部屋の天井からである。日蔭ではよぼよぼとしている彼等は日なたのなかへ下りて来るやよみがえったように活気づく。私の脛すねへひやりととまったり、両脚を拳こぶしげて腋の下を搔かくような模ねまをしたり手を摩すりあわせたり、かと思うと弱よわしく飛び立っては絡からみ合ったりす

るのである。そうした彼等を見ていると彼等がどんなに日光を恰たのしんでいるかが憐あわれなほど理解される。とにかく彼等が嬉き戯ぎするような表情をするのは日なたのなかばかりである。それに彼等は窓が明いている間は日なたのなかから一步も出ようとはしない。日が翳るまで、移つてゆく日なたのなかで遊んでいるのである。虻や蜂があんなにも澆はっらつ刺と飛び廻っている外気のなかへも決して飛び立とうとはせず、なぜか病人である私を模ねている。しかしなんとという「生きんとする意志」であろう！ 彼等は日光のなかでは交尾することを忘れない。恐らく

枯死こしからはそう遠くない彼等が！

日光浴をするとき私の傍かたわらに彼等を見るのは私の日課のようになってしまっていた。私は微ひそかな好奇心と一種馴染なじみの気持から彼等を殺したりはしなかった。また夏の頃のように猛たけだけしい蠅捕り蜘蛛はえとがやって来るのでもなかった。そうした外敵からは彼等は安全であったと云いえるのである。しかし毎日大抵二匹ずつほどの彼等がなくなつて行つた。それはほかでもない。牛乳の壘びんである。私は自分の飲みつ放しを日なたのなかへ置いておく。すると毎日決まつたようにそのなかへはいって出られな

い奴ができた。壕の内側を身体に附着ふちやくした牛乳を引き摺ずりながらのぼって来るのであるが、力のない彼等は どうしても途中で落ちてしまふ。私は時どきそれを眺めていたりしたが、こちらが「もう落ちる時分だ」と思う頃、蠅も「ああ、もう落ちそうだ」というふうに動かなくなる。そして案あんの定落じょうちてしまふ。それは見ていて決して残酷でなくはなかった。しかしそれを助けてやるとうような気持は私の倦アンニユイ怠ニユイからは起つて来ない。彼等はそのまま女中が下げてゆく。蓋ふたをしておいてやるという注意もなおのこと出来ない。翌日になるとまた一匹ずつ

はいつて同じことを繰返くりかえしていた。

「蠅と日光浴をしている男」いま諸君の目にはそうした表象が浮かんでいるにちがいない。日光浴を書いたついでに私はもう一つの表象「日光浴をしながら太陽を憎んでいる男」を書いてゆこう。

私の滞在はこの冬でふた冬目であった。私は好んでこんな山間にやって来ているわけではなかった。私は早く都会へ帰りたいたい。帰りたいたいと思いつた冬もいてしまったのである。いつまで経たっても私の「疲労」は私を解放しなかった。私が都会を想い浮かべるごとに私の「疲

労」は絶望に満ちた街々を描き出す。それはいつになつても変改されない。そしてはじめ心に決めていた都会へ帰る日取りはとうの昔に過ぎ去ったまま、いまはその影も形もなくなっていたのである。私は日を浴びていても、否、日を浴びるときは殊に、太陽を憎むことばかり考えていた。結局は私を生かさないのであるう太陽。しかもうっとりとした生の幻影で私を瞞だまそうとする太陽。おお、私の太陽。私はだらしのない愛情のように太陽が癩しやくに触った。けごろも 裘けごろものようなものは、反対に、ストレート・ジャケット 緊迫ストレート・ジャケット 衣のようもたに私を圧迫した。狂人のような悶もたえでそれを引き裂さ

き、私を殺すであろう酷寒こっかんのなかの自由をひたすらに私は欲した。

こうした感情は日光浴の際身体の受ける生理的な変化——旺さかんになって来る血行や、それにしたがって鈍麻どんましてゆく頭脳や——そういうったものなかに確かにその原因すゐんを持っている。鋭い悲哀ひあいを和やわらげ、ほかほかと心を怡たのしめます快感は、同時に重おもい苦しい不快感である。この不快感は日光浴の済しまんだあとなんとも云えない虚無的な疲れで病人を打ち敗まかしてしまふ。恐らくそれへの嫌悪はいたいから私のそうした憎悪も胚胎はいたいしたのかもしれないのであ

る。

しかし私の憎悪はそればかりではなく、太陽が風景へ与える効果——眼からの効果——の上にも形成されていた。

私が最後に都会にいた頃——それは冬至に間もない頃であったが——私は毎日自分の窓の風景から消えてゆく日影に限りない愛惜あいせきを持っていた。私は墨汁のようにこみあげて来る悔恨かいこんといらだたしさの感情で、風景を埋めてゆく影を眺めていた。そして落日を見ようとすする切なさに駆かられながら、見透みとおしのつかない街を慌あわてふためい

てうろろうろしたのである。今の私にはもうそんな愛惜はなかつた。私は日の当つた風景の象徴する幸福な感情を否定するのではない。その幸福は今や私を傷つける。私はそれを憎むのである。

溪たにの向こう側には杉林が山腹を蔽おおっている。私は太陽光線の偽瞞ぎまんをいつもその杉林で感じた。昼間日ほが当つているときそれはただ雑然とした杉の秀ほの堆積たいせきとしか見えなかつた。それが夕方になり光が空からの反射光線に変わるとはつきりした遠近にわかれて来るのだつた。一本一本の木が犯しがたい威厳をあらわして来、しんしんと

立ち並び、立ち静まって来るのである。そして昼間は感じられなかった地域がかしここにここに杉の秀ほ並なみの間へ想像されるようになる。溪側にはまた檜や椎の常緑樹に交じって一本の落葉樹が裸の枝に朱色しゆいろの実を垂れて立っていた。その色は昼間は白く粉を吹いたように疲れている。それが夕方になると眼が吸いつくばかりの鮮やかさに冴える。元来一つの物に一つの色彩が固有していると
いうわけのものではない。だから私はそれをも偽瞞へんぱと云うのではない。しかし直射光線には偏頗へんぱがあり、一つの物象の色をその周囲の色との正しい階調から破ってしま

うのである。そればかりではない。全反射がある。日蔭は日表ひなたとの対照で闇のようになってしまふ。なんと雑多な溷濁こんだくだろう。そしてすべてそうしたことが日の当った風景を作りあげているのである。そこには感情の弛緩しかんがあり、神経の鈍麻があり、理性の偽瞞がある。これがその象徴する幸福の内容である。恐らく世間における幸福がそれらを条件としているように。

私は以前とは反対に溪間を冷たく沈ませてゆく夕方を——わずかの時間しか地上に駐とどまらぬ黄昏たそがれの巖かな掙おきてを——待つようになつた。それは日が地上を去つて

行つたあと、路の上のみずたまり 潦 を白く光らせながら空から下りて来る反射光線である。たとえ人はそのなかでは幸福ではないにしても、そこには私の眼を澄ませ心を透き徹らせる風景があつた。

「平俗な日なた奴！ 早く消えろ。いくら貴様が風景に愛情を与え、冬の蠅を活気づけても、俺を愚昧ぐまい化かするこ
とだけは出来ぬわい。俺は貴様の弟子の外光派つばに唾をひ
っかける。俺は今度会つたら医者いしやに抗議を申し込んでや
る」

日に当りながら私の憎悪はだんだんたかまってゆく。

しかしなんという「生きんとする意志」であろう。日な
たのなかの彼等は永久に彼等の怡^{たの}しみを見^み棄^すてない。壇
のなかの奴も永久に登っては落ち、登っては落ちてい
る。やがて日が翳^{かげ}りはじめる。高い椎の樹へ隠れるのであ
る。直射光線が気疎^{けうと}い回折光線にうつろいはじめる。彼
等の影も私の脛の影も不思議な鮮やかさを帯びて来る。
そして私は襜^{どてら}袍をまどつて硝子窓^{ガラスまど}を閉^{とぎ}しかかるのであつ
た。

午後になると私は読書をすることにしていた。彼等は
またそこへやって来た。彼等は私の読んでいる本へ纏^{まつ}わ

りついて、私のはぐる頁ページのためにも身体を挟み込まれた。それほど彼等は逃げ足が遅い。逃げ足が遅いだけならまだしも、わずかな紙の重みの下で、あたかも梁はりに押えられたように、仰向けあおむになったりして藻搔もがかなければならないのだった。私には彼等を殺す意志がなかった。それでそんなとき——殊に食事のときなどは、彼等の足弱がかえって迷惑はしになった。食膳しょくぜんのものへとまりに来るときは追う箸はしをことさらゆっくり動かさなくてはならない。さもないと箸の先で汚ならしくも潰つぶれてしまわないとも限らないのである。しかしそれでもまだそれ

に弾ねられて汁のなかへ落ち込んだりするのがいた。

最後に彼等を見るのは夜、私が寢床へはいるときであった。彼等はみな天井に貼りついていて、じつと、死んだように貼りついていて。——一体脾弱^{ひよわ}な彼等は日光のなかで戯^{たわむ}れているときでさえ、死んだ蠅が生き返って来て遊んでいるような感じがあった。死んでから幾日も経ち、内臓なども乾きついてしまった蠅がよく埃^{ほこり}にまみれて転^{ころが}っていることがあるが、そんな奴がまたのことと生き返って来て遊んでいる。いや、事実そんなことがあるのではなからうか、といった想像も彼等のみで

くわからは充分に許すことが出来るほどであつた。そんな彼等が今やじつと天井にとまっている。それはほんとうに死んだようである。

そうした、錯覚に似た彼等を眠るまえ枕の上から眺めていると、私の胸へはいつも廓寥かくりようとした深夜の気配が沁しみて来た。冬ざれた溪間の旅館は私のほかに宿泊人のない夜がある。そんな部屋はみな電燈が消されている。そして夜が更けるにしたがつてなんとなく廃墟に宿さつていいるような心持を誘うのである。私の眼はその荒れ寂さびた空想のなかに、恐ろしいまでに鮮やかな一つの場面を思

い浮かべる。それは夜深く海の香をたてながら、澄み透った湯を溢れさせている溪傍の浴槽である。そしてその情景はますます私に廃墟の気持を募つらせて行く。——天井の彼等を眺めていると私の心はそうした深夜を感じる。深夜のなかへ心が拡がってゆく。そしてそのなかのただ一つの起きている部屋である私の部屋。——天井に彼等のとまっている、死んだようにじつととまっている私の部屋が、孤独な感情とともに私に帰って来る。

火鉢の火は衰えはじめて、硝子窓を潤うるおしていた湯気はだんだん上から消えて来る。私はそのなかから魚のは

ららごに似た憂鬱な紋々もんもんがあらわれて来るのを見る。それは最初の冬、やはりこうして消えて行った水蒸気がいつの間にかそんな紋々を作ってしまったのである。床とこの間の隅には薄うすうく埃をかむった薬壘くすりびんが何本も空になっ
ている。なんとという倦怠、なんとという因いんじゆん循だろ。私の病鬱は、恐らくよその部屋には棲んでいない冬の蠅を
さえ棲ませているではないか。いつになったら一体こう
したことに梟けりがつくのか。

心がそんなことにひっかかると私はいつも不眠を殃わざわ
いされた。眠れなくなると私は軍艦の進水式を想い浮か

べる。その次には小倉百人一首を一首ずつ思い出してはそれの意味を考える。そして最後には考え得られる限りの残酷な自殺の方法を空想し、その積み重ねによって眠りを誘おうとする。がらんとした溪間の旅館の一室で。天井に彼等の貼りついている、死んだようにじつと貼りついている一室で。――

2

その日はよく晴れた温かい日であった。午後私は村の

郵便局へ手紙を出しに行つた。私は疲れていた。それから溪へ下りてまだ三四丁も歩かなければならない私の宿へ帰るのがいかにも億劫おっくうであつた。そこへ一台の乗合自動車を通りかかった。それを見ると私は不意に手を挙げた。そしてそれに乗り込んでしまつたのである。

その自動車は村の街道を通る同族のなかでも一種目だつた特徴で自分を語つていた。暗い幌ほろのなかの乗客の眼がみな一様に前方を見詰めている事や、泥除どろよけ、それからステツプの上へまで溢あふれた荷物を麻繩あさなわが車体へ縛りつけている恰好かっこうや——そんな一種の物ものしい特徴で、彼

等が今から上り三里下り三里の峠を躐こえて半島の南端の港へ十一里の道をゆく自動車であることが一目で知れるのであった。私はそれへ乗ってしまったのである。それにしてはなんとという不似合いな客であったろう。私はただ村の郵便局まで来て疲れたというばかりの人間に過ぎないのだった。

日はもう傾かたむいていた。私には何の感想もなかった。ただ私の疲労をまぎらしてゆく快い自動車の動揺ばかりがあった。村の人が背負い網を負って山から帰って来る頃で、見知った顔が何度も自動車を除よけた。その度私は

だんだん「意志の中ちゆうぶらり」に興味を覚えて来た。そして、それはまたそれで、私の疲労をなにか変った他のものに変えてゆくのだった。やがてその村人にも会わなくなつた。自然林が廻つた。落日があらわれた。溪の音が遠くなつた。年としふ古りた杉の柱廊が続いた。冷たい山気が沁みて来た。魔女の跨またがつた箒ほうきのように、自動車は私を高い空へ運んだ。一体どこまでゆくこうとするのだろう。峠の隧道トンネルを出るともう半島の南である。私の村へ帰るにも次の温泉へゆくにも三里の下り道である。そこへ来たとき、私はやっと自動車を止めた。そして薄暮はくぼの山の中

へ下りてしまったのである。何のために？　それは私の疲労が知っている。私は腑甲斐ない一人の私を、人里離れた山中へ遺棄してしまったことに、気味のいい嘲笑を感じていた。

檜鳥かしどりが何度も身近から飛び出して私を愕おどろかした。道は小暗い谿壁たにひだを廻って、どこまで行っても展望がひらけなかった。このままで日が暮れてしまっはと、私の心は心細さで一杯であった。幾たびも飛び出す檜鳥は、そんな私を、近くで見る大きな姿で脅おびやかしながら、葉の落ちた櫟けやきや榎ならの枝を匍はうように渡って行った。

最後にとうとう谿が姿をあらわした。杉の秀ほが細胞の
ように密生している遙かな谿！ なんとというそれは巨大
な谿だったろう。遠靄とおもやのなかには音もきこえない水も動
かない滝が小さく小さく懸かかっていた。眩暈めまいを感じさせる
ような谿底には丸太を組んだ樵道そりみちが寒ざむと白く匍くつて
いた。日は谿向こうの尾根へ沈んだところであった。水
を打ったような静けさがいまこの谿を領していた。何も
動かず何も聴こえないのである。その静けさはひよつと
夢かと思うような谿の眺めになおさら夢のような感じを
与えていた。

「ここでこのまま日の暮れるまで坐っているということ
は、なんとまじというごうしゃ豪華な心細さだろう」と私は思った。「宿
では夕飯の用意が何も知らずに待っている。そして俺は
今夜はどうなるかわからない」

私は私の置き去りにして来た憂鬱な部屋を思い浮かべ
た。そこでは私は夕餉ゆうげの時分きままって発熱に苦しむので
ある。私は着物ぐるみ寢床へ這入はいっている。それでもま
だ寒い。悪寒おかんに慄ふるえながら秋の頭は何度も浴槽を想像す
る。「あすこへ漬つかったらどんなに気持ちいいことだろう」
そして私は階段を下り浴槽の方へ歩いてゆく私自身にな

る。しかしその想像のなかでは私は決して自分の衣服を脱がない。衣服ぐるみそのなかへはいつてしまうのである。私の身体には、そして、支えがない。私はぶくぶくと沈んでしまい、浴槽の底へ溺死体できしたいのように横よこたわってしまう。いつもきまってその想像である。そして私は寝床のなかで満潮のように悪寒が退ひいてゆくのを待っている。――

あたりはだんだん暗くなって来た。日の落ちたあとの水のような光を残して、冴さえざえとした星が澄んだ空にあらわれて来た。凍えた指の間の煙草の火が夕闇のなか

で色づいて来た。その火の色は曠漠こうばくとした周囲のなかで
いかにも孤独であつた。その火を措おいて一点の燈火も見
えずにこの谿は暮れてしまおうとしているのである。寒
さはだんだん私の身体へ匍はい込んで来た。平常外気の冒おか
さない奥の方まで冷え入って、懷ふところ手でをしてもなんの
役にも立たないくらいになって来た。しかし私は暗やみと寒
気がようやく私を勇氣づけて来たのを感じた。私はいつ
の間にか、これから三里の道を歩いて次の温泉までゆく
ことに自分を予定していた。犇ひしひしと迫って来る絶望に
似たものはだんだん私の心に残酷な欲望を募らせていつ

た。疲労または倦^{アシニユイ}怠^{アシニユイ}がいったんそうしたものに変った
が最後、いつも私は終りまでその犠牲になり通さなければ
ならないのだった。あたりがとっぷり暮れ、私がやっ
とそこを立ち上がったとき、私はあたりにまだ光があつ
たときとはまったく異った感情で私自身を^{ギソウ}臆装^{ギソウ}してい
た。

私は山の凍^いてついた空気のなかを暗^{やみ}をわけて歩き出し
た。身体はすこしも温かくもならなかった。ときどきそ
れでも私の頬を軽くなでてゆく空気が感じられた。はじ
め私はそれを発熱のためか、それとも極端な寒さのなか

で起る身体の変調かと思っていた。しかし歩いてゆくうちに、それは昼間の日のほとぼりがまだ斑まだらに道に残っているためであるらしいことがわかって来た。すると私には凍った闇のなかに昼の日射しがありありと見えるように思えはじめた。一つの燈火も見えない暗というものも私には変な気を起こさせた。それは灯がついたということ、もしくはは灯の光の下で、文明的な私達ははじめて夜を理解するものであるということに信ぜしめるに充分であった。真暗な闇にもかかわらず私はそれが昼間と同じであるような感じを抱いた。星の光っている空は

真青まっさおであつた。道を見分けてゆく方法は昼間の方法と何の変わつたこともなかつた。道を染めている昼間のほとぼりはなおさらその感じを強くした。

突然私の後ろから風のような音が起つた。さつと流れて来る光のなかへ道の上の小石が齒のような影を立てた。一台の自動車が、それを避けている私には一顧いっこの注意も払わずに走り過ぎて行つた。しばらく私はぼんやりしていた。自動車はやがて谿壁を廻つた向こうの道へ姿をあらわした。しかしそれは自動車が走っているというより、ヘッドライトをつけた大きな闇が前へ前へ押し寄

せてゆくかのように見えるのであった。それが夢のように消えてしまふとまたあたりは寒い闇に包まれ、空腹した私が暗い情熱に溢れて道を踏んでいた。

「なんとという苦にがい絶望した風景であろう。私は私の運命そのままの四圍のなかに歩いている。これは私の心そのままの姿であり、ここにいて私は日なたのなかで感じるようななんらの偽瞞をも感じない。私の神経は暗い行手に向かつて張り切り、今や決然とした意志を感じる。なんとというそれは気持のいいことだろう。定罰のような闇、膚を劈つんざく酷寒。そのなかでこそ私の疲労は快く緊張し

新しい戦慄を感じる事ができる。歩け。歩け。へたばるまで歩け」

私は残酷な調子で自分を鞭打った。歩け。歩け。歩き殺してしまえ。

その夜晩おそく私は半島の南端、港の船着場を前にして疲れ切った私の身体を立たせていた。私は酒を飲んでいた。しかし心は沈んだまますこしも酔っていなかっただ。

強い潮の香に混って、瀝チヤン青や油の匂いが濃くそのあたりを立て罩こめていた。もやい綱づなが船の寝息のよういきし

り、それを眠りつかせるように、静かな波のぼちやぼちやと舷側げんそくを叩く音が、暗い水面にきこえていた。

「××さんはいないかよう！」

静かな空気を破って媚なまめいた女の声先ほどから岸で呼んでいた。ぼんやりした燈あかりを睡ねむそうに提げている百噸トシあまりの汽船のともの方から、見えない声が不明瞭になにか答えている。それは重々しいバスである。

「いないのかよう。××さんは」

それはこの港に船の男を相手に媚こびを売っている女らしく思える。私はその返事のバスに人ごとながら聴耳ききみみをた

てたが、あいかわらず曖昧あいまいな言葉が同じように鈍い調子で響くばかりで、やがて女はあきらめたようすでいなくなってしまうた。

私は静かな眠った港を前にしながら転変に富んだその夜を回想していた。三里はとつくに歩いたと思っっているのにいくらしでもおしまいにならなかつた山道や、谿のなかに発電所が見えはじめ、しばらくすると谿の底を提灯ちようちんが二つ三つ閑かな夜の挨拶を交しながらもつれて行くのが見え、私はそれがおおかた村の人が温泉へはいるにゆく灯で、温泉はもう真近にちがいないと思ひ込み、

元気を出したのにみごと当てがはずれたことや、やっと温泉に着いて凍え疲れた四肢ししを村人の混み合っている共同湯で温めたときの異様な安堵あんどの感情や、——ほんとうにそれらは回想という言葉にふさわしいくらい一晩の経験としては豊富すぎる内容であった。しかもそれでおしまいといふのではなかった。私がやっと腹を膨ふくらして人心つくかつかぬに、私の充みたされない残酷な欲望はもう一度私に夜の道へ出ることを命令したのであった。私は不安な当てで名前も初耳な次の二里ばかりも離れた温泉へ歩かなければならなかった。その道でとうとう私は迷つ

てしまい、途方に暮れて暗やみのなかへ蹲うずくまっていたとき、
 晩おそい自動車を通りかかり、やっこのことでそれを呼びと
 めて、予定を変えてこの港の町へ来てしまったのであつ
 た。それから私はどこへ行ったか。私はそんなところに
 は一種の嗅覚でも持っているかのように、堀割ほりわりに沿った
 娼家しょうかの家並みのなかへ出てしまった。藻草もぐさを纏まとったよう
 な船夫達が何人も群れて、白く化粧した女をからかいな
 がら、よろよると歩いていた。私は二度ほど同じ道を廻
 り、そして最後に一軒の家へ這入った。私は疲れた身体
 に熱い酒をそそぎ入れた。しかし私は酔しやくわなかつた。酌

に来た女は秋刀魚船さんまの話をした。船員の腕にふさわしい
逞たくましい健康そうな女だった。その一人は私に姪いんをすす
めた。私はその金を払ったまま、港のありかをきいて外
へ出てしまったのである。

私は近くの沖にゆっくり明滅めいめつしている廻転燈台の火を
眺めながら、永い絵巻のような夜の終わりを感じていた。
舷げんの触れ合う音、とも綱の張る音、睡ねむたげな船の灯、す
べてが暗く静かにそして内輪で、柔にこやかな感傷を誘った。
どこかに捜して宿をとろうか、それとも今の女のところ
へ帰ってゆこうか、それはいずれにしても私の憎悪に充

ちた荒々しい心はこの港の埠頭ふとうで尽きていた。ながい間私はそこに立っていた。気疎い睡気のようなものが私の頭を誘うまで静かな海の暗を見入っていた。――

私はその港を中心にして三日ほどもその附近の温泉で帰る日を延した。明るい南の海の色や匂いはなにか私には荒々しく粗雑であった。その上卑俗で薄汚い平野の眺めはすぐに私を倦あかせてしまった。山や溪が鬩せめぎ合い心を休める余裕や安らかな望みのない私の村の風景がいつか私の身についてしまっていることを私は知った。そし

て三日の後私はまた私の心を封^{ふう}じるために私の村へ帰つて来たのである。

3

私は何日も悪くなった身体を寢床につけていなければならなかった。私には別にさした後悔もなかったが、知った人びとの誰^{だれ}彼^{かれ}がそうしたことを聞けばさぞ陰気になり気を悪くするだろうとそのことばかり思っていた。

そんなある日のこと私はふと自分の部屋に一匹も蠅が

いなくなっていることに気がついた。そのことは私を充分驚かした。私は考えた。恐らく私の留守中誰も窓を明けて日を入れず火をたいて部屋を温めなかった間に、彼等は寒気のために死んでしまったのではなからうか。それはありそうなことに思えた。彼等は私の静かな生活の余徳を自分らの生存の条件として生きていたのである。そして私が自分の鬱屈うっくつした部屋から逃げ出してわれとわが身を責め虐さいなんでいた間に、彼等はほんとうに寒気と飢えで死んでしまったのである。私はそのことにしばらく憂鬱を感じた。それは私が彼等の死を傷いたんだためでは

なく、私にもなにか私を生かしそしていつか私を殺してしまうきまぐれな条件があるような気がしたからであった。私はそいつの幅広い背を見たように思った。それは新しいそして私の自尊心を傷つける空想だった。そして私はその空想からますます陰鬱を加えてゆく私の生活を感じたのである。

(昭和三年二月)

日本文学電子図書館

「梶井基次郎 ちくま日本文学028」

著 者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年11月10日 第1刷

日本文学電子図書館